
にっきちょう！！

藤野 灯子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

につきちよう!!

【Nコード】

N1648X

【作者名】

藤野 灯子

【あらすじ】

『ノートを開くだけで、その開いた人の一日が記されてしまう日記帳。これがあれば、どんな人の気持ちも筒抜けになるでしょう。』

…さあ、お楽しみを始めましょうかー！？』

不思議な日記帳にまんまとひっかかる男子高校生、阿久津真司。でもその私生活は、とびつきり可愛い男の娘が彼女状態という、羨ましいような羨ましくないような濃い生活を送っているようだった。本物の女の子と交流したいと思いつつも、周りにはなかなか個性的

な女の子ばかり。

冴えない男のハーレム……？になるかもしれないラブコメディ。

プロローグ

「ねえねえ、知ってる？」

「…なに」

「もーなんでそんな冷たいのさ」

「うるさい、いつものことでしょ。なんなのよ」

「こわいなあ。えへへ、なんか最近不思議な日記帳が出回ってるらしいんだって」

「へえどんな？」

「いやあー、何でかは知らないんだけどー…」

ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー〇ー

寒いような暖かいような曖昧な空気が外から流れ込んでいる。

近辺には私立上代学園高等学校、コンビニエンスストアが並ぶ、学生には立地条件の良い小さなマンションのエントランスで、私は一冊の分厚いノートをもてあそんでいた。

真新しい制服を身につけ、ただ突っ立っている私を見るここの住人の視線は好奇の目。

誰かの恋人なのだろうかとか思ってるのかしら？でも残念、私はただのいたずらっ子。

「さあ、お楽しみを始めましょうか」

カシヤンと、ポストのふたが開閉する無機質な音が響いた。

阿久津真司の一日 ぱーとわん!

「春。桜が舞う季節。新たな出会いに対する期待と不安ー。ほら、なんだかわくわくするじゃない?」：なんてことを言っていた奴がいる。

俺は別に否定はしないが、肯定もしない。まあ生憎、今年は雨で桜の花びらも平伏している状態だ。水を吸って舞うことのできない桜を残念そうに見るあいつを思い浮かべながら、安っぽいビニール傘をさす。

俺、阿久津 あくつ 真司 しんじは今日で上代学園高校の生徒になる。

上代学園なんて仰々しい名前からして、ここは私立高校だ。

A〜Eまでのクラスを成績順に振り分けていて、けっこうピンからキリまでの生徒がいる。

といっても、1番上のAクラスで偏差値50過ぎくらいのバカ学校だがな。

そして、俺はその中のBクラスに所属することになっている。そう、俺はバカなんだよ。

「しーんーじいーっ!」

「うおわっ!」

っ背中に激痛が…!? 言ってえっ

「もーなんで先行こうとしてんのさ!俺が迎えに来るまでマンションの前で待っててって言ったじゃんっ」

殴られた背中をさすりながら後ろを振り返ると、冒頭の「春…(以下略)」を高らかに語っていた張本人がいた。

「男2人で仲良く登校して気持ち悪いだろ…」

そういや、こいつ傘と鞆で両手塞がってんのにどうやって俺を殴ったんだ。傘か？お前傘で俺の背中突いたのか？

「む…幼なじみなのに…ずっと一緒にいようって前言ったのに…」

「言っ
てねえ。誤解を招くことを言うな。ってか、幼なじみってだけでフラグ立てようとすんなよ。それは男女専用のフラグだ」

今、頬を膨らまして俺を睨みつけるこいつは泉咲夜いずみさきやという。

幼い頃から仲が良くて、幼稚園から中学までずっと行動を共にしていた。まあこれからも一緒になるだろうけど。

これだけ聞くと、普通の幼なじみの男友達だが、咲夜はかなりの女顔だ。しかもアイドル顔負けのとびっきり可愛い。

このステータスによって、俺らはただの男友達ではなくなる。

一緒に並んで歩くだけで、道ゆく男共に羨望と妬みの目線を寄こされ、映画を見に行けばカップル扱いされ…なんつーか、彼女状態になるわけだ。

でも高校からは咲夜と距離をとって、そろそろ俺もちゃんとした女の彼女が欲しいなあと思ってるんだけど…

「うーっ、真司のばーかっ！」

「はあ？」

「ふーんだ、もういいよっ早く行かないと遅れるからね入学式…！」

「あ、おいちよっと待てって…」

∴ やっぱり、距離を置けそうにもないな。

阿久津真司の一日 ぱーとつー！

「なあ、おい咲夜」

俺が1人暮らしをし始めたマンションから5分ほどの場所にある上代学園。

現在、入学式会場の手前にある狭苦しいホールで新入生が待機している。

もうすぐで新入生入場の合図が出されるはずだ。

「もういーもん。真司なんて知らない。口聞いてやんないっ」

待たずに先行ったことを根に持っているのか、俺に背中を向けて腕を組む咲夜。てか、口聞いているけどな。

「まだ怒ってんのか？ 悪かったって。これからは毎日一緒に行ってやるから…」

咲夜が機嫌を損ねるとろくなことがない。

拗ねてる顔もこれまた可愛かったりするんだが、見た目によらず総合格闘技を習ってて無駄に強いからだ。

今までにも、けっこういろんなことをやらかしてる。

俺も何度かケンカくらいはしたことあるし、腕っぷしも強い方だと自負しているが、こいつには到底勝てない。

だって、壁殴ってヘコませたとこ見たことあんもん。こええよ。

「…毎日？」

咲夜の耳がぴくっと動いた。

「おう、毎日」

対して俺はびくびくしながら咲夜の様子を見る。

「ふうーん…じゃあ許してあげる。でも今度クレープおごってね？」

「ま、前もおごったじゃねえかよ…」

「文句あるの」

「…いや、…ない…けど」

俺の財布がまた甘ったるい物体のために寂しくなるのか…

「何にしようかなあ？あ、この前のクレープ屋さんもよかったけど、他に美味しそうなお店見つけたんだよー」

「そうか……………」

「でも、これから歩いて2時間以上はかかるけど、ついてきてくれるよね？」

「いつ、2じか…………?!」

「……………ね？」

「…はい」

ちくしょう、こいつ俺の休日潰すつもりか。

「はーあ、また朝っぱらからイチャイチャしてんのね」

意気消沈している俺に、低く澄んだ声が投げかけられた。

「なんかほんと…気持ち悪いわよ」

肩まである赤っぽい髪を軽くかきあげるメガネの女、おおとり まき鳳 真希。
中学のときクラスメートだった奴だ。

「おあーっ真希じゃん、久しぶりっ」

俺を押しつけて真希の前に立ち、ひまわりのような笑みを浮かべる
咲夜。

「久しぶりって…3日前も会ったじゃない、ジムで」

「えー、3日って長いよ？」

この2人は総合格闘技仲間。

いつも俺には呪文のように聞こえる話ばかりする。

…まあ、面白くないといっても嘘じゃない。

俺の周りにはこういう習い事とかしてて、キラキラしてる奴らばかりなんだよな…

俺ももう高校生なんだし、何か目標見つけて将来とか考えないとダメなのもわかってるけど。

わかる人はわかってくれるだろうが、そんなのは簡単に見つからないもんなんだ。

「…あ！真希ちゃんっ」

不意に、後ろにハートが付いてきそうな勢いの声が聞こえてきた。

「？、来た。あーもー見つかったし…」

咲夜と謎の会話を交わしていた真希が顔をしかめる。それと同時に咲夜が小走りで俺の隣に戻ってきた。

…なんか可愛いな。

「ふわあああっ、真希ちゃんだ！久しぶりーっ、会いたかったよ、すっごく会いたかったよおおおおお」

変に高いテンションで、真希に抱きつくポニーテールの女。

「うるさい、美琴。ていうか触るなっ」

桐生 美琴。きりゆう みこと…一言で表すと、変態だ。

「あう、ごめん…。でも怒ってる真希ちゃんも可愛いっ、愛してるー！」

「きんも」

「うええっ？」

このレズっ気たっぷりのやり取りは、中学でもう聞き飽きた。真希にはそういう気はないんだろうが、美琴が生粋のレズ。そして、美琴は真希に殴られようが蹴られようがめげない。

俺は相当なMだと踏んでいる。

「また始まったねえ、やっぱ俺らと同じくらい仲良しさんだー」

「おいおい、それはどういう意味だ？」

今のはちよつと爆弾発言だぞ、咲夜。

俺は断じてホモじゃねえ。

「…あれ？なんだ、真司と咲夜かよ。いたのか」

俺達を見るなり、目を曇らせ声を一オクターブくらい落とす美琴。さっきの声でやっと俺達の存在を認識したんだろう。

男に興味がなく、女好き…の女。

よく考えたら変わってるよな、今改めて思った。…普通逆だろ。

「美琴も久しぶりだねえ、元気してたー？」

咲夜は男女分け隔てなく甘ったるい声を出す。

「あーまあ、普通かな」

「あたし、美琴の顔見て一瞬で元気なくなったわ」

「えええええっ、ご、ごめんっ怒ってる？ごめんってばーっ」

…この2人はこれのループが常。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1648x/>

につきちょう！！

2011年11月9日14時02分発行